

講演会（第76回例会）

演題：これからの介護の在り方

実施期日：平成31年4月25日（木）

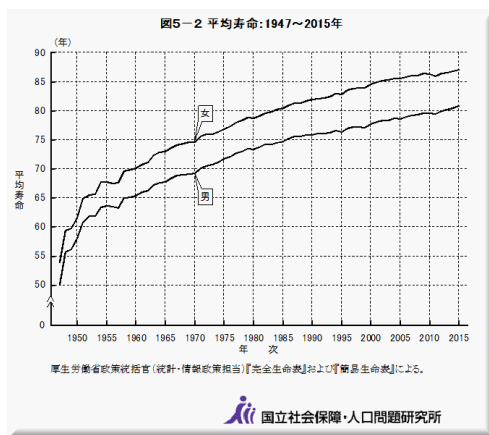
会場：アオッサ706,707号室：

講師：あさむつ苑 山田達也氏

参加者：81名（内新会員1名）

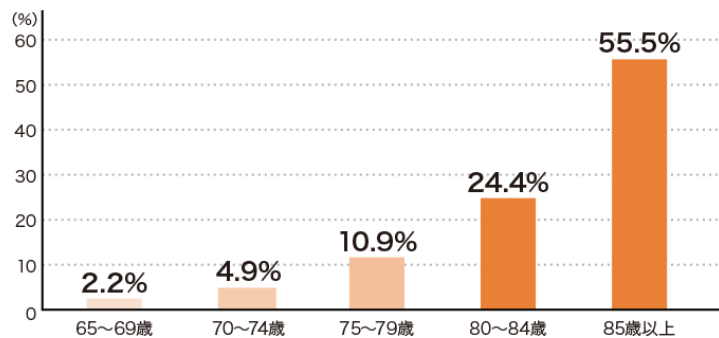
講演に先立ち、福井会長より来賓として参加された福井県福祉部長寿課課長：境勝利氏と、講師の社会福祉士、介護支援専門員などの資格をお持ちで、グループホームあさむつの森の管理者で介護士の山田達也氏を紹介、境課長からは高齢者の健康に関わる当会への謝辞と、今日は講演を通じて勉強させて欲しいとの挨拶、講師の山田氏からは、重たいタイトルを頂き、緊張してお話をさせてもらうとの挨拶を頂いて講演に入る。

山田氏は1947年から2015年までの右肩上がりの男女別平均寿命のグラフを示し、1947



年の平均寿命は男女とも50歳代であったものが、1947年には女子は85歳を、男子も80歳を超えるまでに伸び、「人はなかなか死ねなくなった」と表現された。一方で1960年の総所帯数は約2億2万3千、1世帯の家族は約4.1人であったものが2010年には所帯数は5億を超え、1世帯の家族は逆に約2.4人にまで減って核家族化したことに触れられた。また、総人口における高齢者の割合が急速に増え続けているグラフも示され、1964年に東京オリンピックが開かれた

年には75歳以上の高齢者は187万人であったものが現在では1641万人、また、その時点で100歳以上は200人弱であったものが、現在では6万人以上・実に300倍にもなっている事に触れられ、当然のことながら認知症患者も大幅に増加していることと指摘された。



左のグラフは日本人が実際に認知症にかかっている人の割合である。このグラフを見ても分かるように、75~79歳では約10人に一人、80~84歳では5人に一人、85歳以上では2人に1人以上の割合となっており、今後益々増加すると思われる。

る。

ここで認知症に話を移された。認知症の種類にはアルツハイマー型認知症（約 5 割）、脳血管性認知症（約 2 割）、レビー小体型認知症（約 2 割）その他の認知症（約 1 割）があるとのこと。人は加齢によって物忘れもするが、病的なものとしては時間が分からなくなったり、場所が分からなくなったり、人物が分からなくなったりする。同時に考えるスピードが遅くなり、二つ以上のことが重なるとうまく処理できなくなったり、いつもと違う事態が起きると混乱したり、眼に見えるものは理解できても、計画を立てて段取りが出来なくなったり、その場の状況が読めなくなったりする。

認知症を予防するには一人で家に閉じ籠もらず、出来るだけ人と交わり、日常的に自分の役割・日課を持つことが大切である。また、ストレスをためないで趣味など自分の好きなこと、楽しいことに打ち込むとともに、本を読んだり、出来るだけ頭を使うように心がけることも大切である。

認知症の人に対応する場合に大切なことは、本人が一番つらいことを理解してあげることである。いつもにこやかに接し、言葉で慰めたり安心させたり、ほめてあげたりすることである。通常認知症への対応の心得として『3つの「ない」』・驚かせない・急がせない・自尊心を傷つけない、の3つに気配りすべきである。また、自分の役割や日課を持たせたりする配慮も必要である。現に施設で食後の皿洗いの手伝いをお願いし、うまく出来たことを評価したことで以後それを日課とするようになった例はいくらでもある。認知症の人は失敗に失敗を重ねることで自信を失い、時には自己嫌悪に陥ることが多いので、失敗は誰にでもあることを伝えて勇気づけたあげることでもある。

最近高齢者が大幅に増加したり、認知症の要介護者が増えたりして、また、高齢者関係者が声を挙げないこともあって、高齢者関係の法制定は遅きに失した感もあるが、2006年には高齢者虐待防止法が制定された。これによって、高齢者を虐待している現場に出くわした場合は市町村に通報することが義務付けられている。（が、罰則はないとのこと）。

その一方で身体拘束の問題がある。これは部屋に鍵をかけて閉じ込めたり、ベッドや車椅子に括りつけたりする拘束であるが、患者本人の生命の保護、重大な身体損傷を防ぐために止む無く行われる行動制限を除いて法度となっているが、介護者の手が足りない等の理由で必ずしも遵守されていないのが現状のようだ。

最後に山田氏のご自分の経験から、要介護者に寄り添う介護をすることで、認知症の症状は軽減されるとの言葉で締めくくられた。 以上 大野 記